

第33号(2019年夏)

編集・発行 千葉市動物公園ボランティア

## 千葉市動物公園の

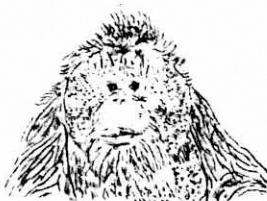
### ①まちかで見つめあえる

#### — オランウータン —



東南アジアのボルネオ島とスマトラ島に生息するオランウータン。通常は森の木の上にいるので、当園でもメスのキャンターは高い場所にいることが多いです。一方オスのフトシは人工保育で育てられたため、人間が好きで、よく地面に座って人を見ています。とくにガラスの前にいるときは、わたしたちもすぐ近くでその大きな体を見て迫力を感じることができます。枝にぶら下がるための長い手や指、オスの強さを示す顔の大きなひだも必見。また、100キロ近い巨体にもかかわらず、つぶらなひとみは可愛いです。

去年日本平動物園からやつて来たキャンターはフトシに興味があるようですが、近づくとフトシは逃げ腰に。でも時には仲むつまじいところが見られることもあります。



### ②人の暮らしに欠かせない

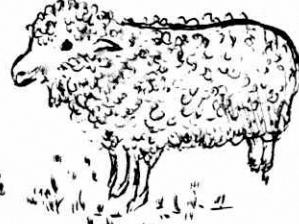
#### — ヒツジ —

皆さんは夜、眠れないとき、ヒツジが1匹、ヒツジが2匹…と数えたりしますか? 本物のヒツジを子ども動物園に見に行きましょう。

ここにいるのは、ニュージーランド原産のコリデールという種類で、角はなく、おとなしくて、一緒にいるヤギにおされっぱなしのように見えます。

上唇は二つに割れていて上の前歯がなく、下の歯と唇と舌で上手に草をからめとって食べます。毛はどこまでも伸び続け、夏になる前に人間が刈りとて、糸や布、フェルトなどを作ります。モンゴルなどの国々ではフェルトを使って家を作ることもあり、ヒツジを飼っていれば衣食住すべてまかなえることになります。

日本でもヒツジは干支の中にいるくらい、人とは長い友だちなのです。



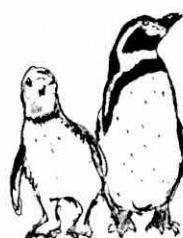
★それぞれの動物が見られる場所は裏の地図をご覧ください。

### ③ペンギンは 羽が命

#### — フンボルトペンギン —

子ども動物園には今年2月に生まれたフンボルトペングインの幼鳥がいます。大きさ・形は親と似ていますが、胸に黒帯模様がないのが子どもです。

卵からかえったペンギンのヒナは全身茶褐色のフワフワの羽におおわれています。この羽では泳げず巣穴で過ごします。2か月ほどで幼鳥の羽になり、巣穴から出てきて、約1年後の換羽(羽の生えかわり)までその姿です。おとなになってからも年に1度、1~1.5か月かけて全身の羽が抜け替わり、その間は水に入らず食欲もなくなります。普段も防水のためにお尻にある尾腺から油を出し、くちばしで全身にこすりつけて手入れをしています。それほどペンギンにとって羽は大切なものです。



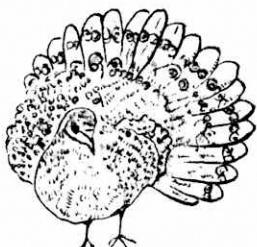
当園では梅雨前から換羽が始まり、夏には新しい羽で泳いでいます。

### ④小さいながら クジャクの気品

#### — ハイイロコクジャク —

東南アジアに広く分布するキジ科の鳥です。名前の通りクジャクより小さくて派手はありませんが、オスの羽にはクジャクらしい目玉のかたちの模様があります。春から夏にかけての繁殖期、オスは尾羽を扇子のようなくぎく広げるディスプレイをしてメスに求婚します。当園のカップルも、繁殖に挑戦中です。ヒナに会える日が待ち遠しいですね。

午後2時すぎから夕方にかけて、オスが手前の止まり木にとまって鳴くことがあります。そんな時は、羽の模様の美しい輝き、大きさや微妙な色合いのちがいなどを近くで観察できるチャンスですよ。独特な鳴き声も、ぜひ聞きに来てください。鳥類水系ゾーンのキジ舎で、ほかのキジの仲間といっしょに見られます。



## ⑤展示場のリフォーム完成 —アフリカライオン—

当園には2頭のライオンがいます。頑固でマイペースなトウヤと、人懐こいアレン。両方ともオスで、一緒にするとケンカをしそうなので分けています。アレンはガラス張りの展示場、トウヤはサバンナをイメージした展示場にいますが、こちらは今春改修され、飼育係や来園者の意見を取り入れて暑さ寒さに対応した作りになりました。岩山（アフリカ語で「コピエ」）の上は床暖房になっており、下の洞穴は直射日光をさえぎります。

野生のライオンは毎日食事をしないので、当園でも週2回は絶食日であります（トウヤは水、土、アレンは日、木）。より快適になった環境で、野生に近い姿で暮らすライオンをごらんください。何回も足を運んでいただければ、色々な姿を見られます。



## ⑥過酷な環境 家族で団結 —ミーアキャット—

北口ゲートを上がると正面で来園者を出迎えてくれるのが、アフリカ南部の荒れ地やサバンナに群れで暮らすミーアキャットです。当園ではオス8頭、メス2頭を飼育しています。



立ち姿で有名ですが、ワシなどの鳥やヘビ、ジャッカルなど、多くの天敵に囲まれた厳しい環境で群れを守るために、交代で見張りに立っています。群れの第一順位のオスとメスのペアだけが繁殖することができます。

母系集団で、基本的にオスは生後1.5~2歳で群れを離れますが、メスは群れに残り、ヘルパーとして子守や授乳を行います。メスは子を産んでいなくても乳を出すことができ、幼い子どもたちにサソリなどの危険なエサの捕り方を教えるそうです。

★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOO ボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

## ⑦歯がのびすぎないように 木をかじる —アメリカビーバー—

アメリカやカナダに生息し、げっ歯類（ネズミの仲間）としてはカピバラの次に大きい種類です。尻尾は船のオールのように平たい形で、後ろ足に水かきがあり、泳ぎが得意。潜水能力もすぐれていて、最大で15分も潜っていることができるそうです。

野生では家族で暮らし、一生伸び続ける門歯で木を切り倒し、ダムや巣を作ったりします。かじれるように、展示場には桜の木などが立ててあり、早い時は1本を15分程度で倒すこともあります。

当園にいるのは17歳のドンと息子のキン（3歳）と、2月にキンのお嫁さんとして迎えたマツコで、展示場には若い2頭が出ていることが多く、少し体が大きくなる方がキン、顔に黒いシャドーが入っているように見えるのがマツコです。



夜行性のため、比較的14時半以降に活動する姿が見られます。

★「絵本のおはなし会」が毎週土曜11時30分より動物科学館2階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

